

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成30年6月26日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03316

研究課題名(和文) 戦間期中欧論の比較研究：民族自決原則と欧州統合の起点としての地域再編論

研究課題名(英文) The Concept of Central Europe in the Interwar Period

研究代表者

福田 宏 (FUKUDA, HIROSHI)

成城大学・法学部・准教授

研究者番号：60312336

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究における最大の成果は、査読付雑誌『地域研究』16巻1号の総特集「ロシアとヨーロッパの狭間：ウクライナ問題と地域史から考える」である。同特集にて、本科研メンバー5名が戦間期中欧論をめぐる論考を執筆し、次いで、2014年に深刻化したウクライナ危機に関して別の4名の執筆者に寄稿を依頼し、現在と過去の両面から当該地域にアプローチした。また、研究者4名による座談会も設定し、歴史研究と現状分析をブリッジする形の議論を展開した。

上記特集以降は、基本的には個々の研究の深化を優先したため、本研究期間内に改めて総合的な成果を出すには至らなかったが、個別の業績としては相当数を公にすることができた。

研究成果の概要(英文)：The greatest achievement in this research is the special issue "the space in-between Russia and Europe: from a perspective both of the Ukrainian crisis and history of the area" of a peer reviewed journal "JCAS (Japan Consortium for Area Studies) Review" (vol.16, no. 1, 2015). While all of five members of this project contributed articles to this issue about the idea of Central Europe (or Mitteleuropa) in the Interwar period, four articles focusing on the Ukrainian crisis were written by another authors. In addition to that, a round-table discussion bridging between historical research and analysis of the current situation was attached to the issue.

研究分野：国際関係論

キーワード：チェコ スロヴァキア ドイツ ハンガリー ポーランド 中欧論 EU 地域統合

1. 研究開始当初の背景

本研究においては、ヨーロッパ統合の前史として戦間期中欧再編論を探究することを目的とした。ドイツ又は旧ハプスブルク帝国の領域を中心とする中欧概念は、1989年に「鉄のカーテン」が消滅して以後、日本でも注目されるようになっていく（典型的な例としては『思想』2012年4月中欧特集号を参照）。こうした潮流を前提としつつ、本研究では、チェコやスロヴァキアの中欧論を軸に、ドイツやハンガリー、ポーランドといった他国の議論との比較も行いながら、戦間期における地域再編論を批判的に再検討した。

2. 研究の目的

中欧が関心を集める直接のきっかけとなったのは、言うまでもなく冷戦の終結である。研究分担者の板橋拓己が指摘するように、1990年代には「再統一」を成し遂げたドイツの自意識として中欧が復活する一方、旧東欧諸国のヨーロッパへの「復帰」を象徴するものとしても中欧が語られるようになった。さらには、EUの東方拡大と平行する形で、過去の様々な中欧論がヨーロッパ統合の前史として「再発見」された。その過程では、西欧的自由主義の「伝統」、すなわちヨーロッパ統合の「正史」に収まらない統合論にも焦点が当てられ、ファシズムやナチズム、或いはそれとの接点を有する「グレイ・ゾーン」の地域再編構想にも関心が高まっている（遠藤乾編『【増補版】ヨーロッパ統合史』名大出版会、2014）。例えば、日本でも比較的良好に知られている R. クーデンホーフ＝カレルギー（以下、カレルギーと記す）は、貴族主義の要素を持ち、親ファシズムの傾向を有したという点で「グレイ・ゾーン」の典型的事例と見なすことができよう。

こうした中、代表者も戦間期中欧論に関心を持ち、スロヴァキア人のミラン・ホジャ（Milan Hodža, 1878-1944）を一つの事例として取り上げるようになった。彼は戦間期のチェコスロヴァキアにおいて首相を務め、英語の著作『中欧における連邦』（*Federation in Central Europe*, 1942）を残した人物である。だが、第二次世界大戦中の亡命時に内部抗争に敗れ、社会主義時代には「反動」としてタブー視されたことから、彼は二重に忘却された形となっていた。ホジャが正当な評価を受けるようになったのは、1989年以降、特にEU加盟が具体的に議論されるようになった90年代末より後のことである。

代表者は2007年から10年にかけて在スロヴァキア大使館の専門調査員を務めた際、EU加盟後の同国で、ホジャが「偉大な欧州人」として「再発見」される過程を目の当たりにし、この人物に強い関心を抱くようになった。また、EU統合の前史として戦間期の議論に着目し、自国の「ヨーロッパ性」を再確認する傾向は、他の旧東欧諸国でも共通し

て見られる。代表的な研究としては、19-20世紀のドイツ・ポーランド・ハンガリーにおける欧州再編論を比較検討した論文・史料集（W. Borodziej, et al., eds., *Option Europa*, 2005, 3vols.）が挙げられよう。代表者もまた、こうした流れを意識しつつ、チェコとスロヴァキアの中欧論を比較検討した論考を執筆した他、研究分担者の辻河、宮崎らと共に第5回スラヴ・ユーラシア研究東アジア国際学会（2013年8月・大阪）に参加し、チェコの中欧論研究者を招いてパネルを組織するなど、本研究に向けての準備を着々と進めてきた。

先に紹介した論文・史料集の *Option Europa* は、ドイツ・ポーランド・ハンガリー三国の中欧論を網羅的に紹介したものであり、本研究にとっても非常に貴重な情報源である。だが、同書はEUの東方拡大を契機として生まれた論文集であり、そこには、旧東欧諸国のヨーロッパへの「回帰」を示す意図が濃厚に含まれている。その理解によれば、中欧諸国は東西冷戦の中で「東側」に組み込まれたが、本来的にはヨーロッパの一員であり、歴史的にも数多くの欧州計画（*Europapläne*）が構想されていた、ということになる。こうした旧東欧諸国の潮流に対し、本研究では、ハプスブルク王朝の再興を目指す復古的な議論やファシズム・ナチズムに親和性を持つ再編論など、必ずしも現在のEUに回収されない議論を含めて、当時の中欧論を見るようにした。そもそも、現在のEUは冷戦下の自由主義陣営という特定の枠組みの中で発展してきたものである。本研究における第一の意義は、「暗い遺産」とも呼ばれる欧州統合史の負の側面を含めて中欧論の全体像を提示することにあつた。

とはいえ、中欧論そのものは、ナチス・ドイツの新秩序構想（これも一種の中欧論と言える）と第二次世界大戦、そして冷戦の成立を経て、議論する理由を失った。その意味では、中欧論の歴史は失敗の歴史であったと言えるが、その点にこそ、戦間期中欧論を再検討する意義があると思われる。現在では、東アジア共同体に関する議論が盛んであり（先駆的な例として、毛利和子編集代表『東アジア共同体の構築』全4巻、岩波書店、2006-7）、EUとの比較研究も散見されるようになっていく。だが、現在のEUと東アジア地域では相違点が大きく、東アジアにおける共同体形成の難しさが再確認される結果に陥りがちである。しかしながら、失敗の連続であった戦間期中欧に注目することにより、逆説的ながら、東アジアにおける議論との比較はより容易になるだろう。本研究では歴史的視点から戦間期の地域再編論にアプローチし、そこから、東アジア共同体との比較研究に向けたブレークスルーを試みることになる。これが本研究における第二の意義であった。

3. 研究の方法

中欧そのものは複数の国家を包含する領域概念であるが、それに関する考察については、国ごとに研究動向が異なり、また、言語上の障壁も比較的高いことから、現地の研究者であっても共同研究の形で行われることが多い。そこで本研究においても、5名の研究者によるグループを立ち上げ、中欧論の比較研究に向けた体制を構築した。

具体的には、チェコとスロヴァキアを代表者（福田）が担当し、ドイツを板橋、ハンガリーを辻河、ポーランドを宮崎、フィンランドを石野がそれぞれ担当した。以上の研究分担者は、いずれも地域認識および地域再編に関して多くの業績を積み上げてきた研究者である。本研究においては、それぞれの実績に依拠しつつ、各国で中欧を論じた政治家もしくは知識人の動向を中心に分析した。

また、本研究を立ち上げる準備段階として、2014年度において、福田が比較政治学会（6月）で研究報告を行った他、石野と宮崎が国際政治学会（11月）で関連テーマについて報告を行った（板橋は司会として登壇）。さらには、査読付き学術雑誌『地域研究』16巻1号（2015年11月刊行）において中欧論に関わる総特集の準備を開始した。

4. 研究成果

本研究における最大の成果は、上に述べた『地域研究』16巻1号の総特集「ロシアとヨーロッパの狭間：ウクライナ問題と地域史から考える」である。同特集にて、本科研メンバー5名が戦間期の中欧論をめぐる論考を執筆し、次いで、2014年に深刻化したウクライナ危機に関して別の4名の執筆者に寄稿を依頼し、現在と過去の両面から当該地域にアプローチした。また、各方面にて第一線で活躍する研究者4名による座談会も設定し、歴史研究と現状分析をブリッジする形の議論を展開した。

上記特集以降は、基本的には個々の研究の深化を優先したため、本研究期間内に改めて総合的な成果を出すには至らなかったが、後述のリストで示すように、個別の業績としては相当数を公にすることができた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計18件）

1. 福田宏 『『国民楽派』再考に向けて：ドヴォジャークにおける社会進化論とオリエンタリズム』『東欧史研究』39号、2017年、112-118頁、査読無し。
2. 福田宏 [書評]「北村厚『ヴァイマル共和国のヨーロッパ統合構想：中欧から拡大する道』ミネルヴァ書房、2014年」『歴史学研究』944号、2016年、39-42頁、査読無し。
3. 福田宏「スロヴァキア：国民記憶院と『スロヴァキア国』をめぐる歴史論争」『ロシア・ユーラシアの経済と社会』1005号、2016年、13-16頁、査読無し。
4. 福田宏「パン・ヨーロッパとファシズム：クーデンホーフ＝カレルギーとヨーロッパの境界」『地域研究』16巻1号、2015年、118-136頁、査読有り。
5. 福田宏「ロシアとヨーロッパ：狭間の地域研究」『地域研究』16巻1号、2015年、8-15頁、査読有り。
6. 福田宏「『危機の時代』における西と東の狭間」『地域研究』16巻1号、2015年、110-117頁、査読有り。
7. 岩下明裕、遠藤乾、川島真、林忠行、福田宏（司会）[座談会]「地域と地域の間を読み解くために」『地域研究』16巻1号、2015年、16-35頁、査読無し。
8. 板橋拓己「『西洋を救え！』：アデナウアー政権とアーベントラント運動」『ゲンシヒテ』9号、2016年、3-17頁、査読有り。
9. 板橋拓己「メルケルはEUを維持できるか：Brexitとドイツの憂鬱」『中央公論』1594号、2016年、116-119頁、査読無し。
10. 板橋拓己「ヴァイマル期ドイツにおける『西洋』概念の政治化：ヘルマン・プラッツと雑誌『アーベントラント』」『地域研究』16巻1号、2015年、137-154頁、査読有り。
11. 板橋拓己「アメリカの社会科学」とどう向き合うか：ドイツの国際関係論（IB）の歴史と現状（1）」『成蹊法学』83号、2015年、217-243頁、査読無し。
12. 池本大輔、板橋拓己、川嶋周一「鼎談：イギリス総選挙が象徴する20世紀的EUの限界」『中央公論』1580号、2015年、130-141頁、査読無し。
13. 宮崎悠「アイザイア・バーリン『二つの自由概念』の歴史的背景」『現代思想』45巻19号、2017年、233-245頁、査読無し。
14. 宮崎悠「戦間期ポーランドのマイノリティと居住地：アポリナルィ・ハルトグラスの残留型シオニズム」『地域研究』16巻1号、2015年、196-214頁、査読無し。
15. 辻河典子「現代ハンガリー政治における包摂と排除：ヨッピクの『人民政党』路線をめぐる」『新しい歴史学のために』291号、2018年、18-33頁、査読無し。
16. 辻河典子「地域的独自性を通じた民族的一体性への貢献：第二次ウィーン裁定後のコロジュヴァールの学術機関を事例に（1940-44年）」『エスニック・マイノリティ研究』1号、2017年、35-51頁、査読無し。
17. 辻河典子「ロカルノ体制批判とハンガリー地理学：テレキ・パール」『ヨーロッ

パ論』から」『地域研究』16 卷 1 号、2015 年、155-172 頁、査読有り。

18. 石野裕子「『大フィンランドは祖国と同様である』：エルモ・カイラとカレリア学徒会の地域構想」『地域研究』16 卷 1 号、2015 年、173-195 頁、査読有り。

[学会発表] (計 12 件)

1. Hiroshi Fukuda, [Roundtable] “Area Informatics at the Center for Integrated Area Studies in Japan,” 9th World Congress of ICCEES (International Council for Central and Eastern European Studies), 2015, Makuhari, Japan.
2. 福田宏「旧ハプスブルク君主国の貴族とヨーロッパ：ロアン公爵とクーデンホーフ＝カレルギー伯爵」日本政治学会、2015 年、千葉大学。
3. Takumi Itabashi, “GSVP und Japan: Möglichkeit der Zusammenarbeit,” Bedingt einsatzbereit! Die gemeinsame Sicherheits- und Verteidigungspolitik der EU, 2017.
4. 板橋拓己「『西ドイツ保守主義』に関する一考察」世界政治研究会、2016 年、東京大学山上会館。
5. 板橋拓己「戦後 70 周年：ドイツの戦後から何を学ぶか」丸の内政経懇話会、2015 年、LEVEL XXI 東京會館。
6. 板橋拓己「『西洋を救え！』西独アデナウアー政権とアーベントラント運動」日本政治学会、2015 年、千葉大学。
7. 辻河典子「第二次ウィーン裁定後のコロジュヴァールにおける学術機関の役割 (1940-44 年)：サボー・T. アティツラの論考を中心に」ワークショップ「東欧の『境界 (ボーダー)』における領域性・空間認識の比較研究」2017 年、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター。
8. Noriko Tsujikawa, “Denominations and National Identity in Hungary at the Turn of the Century: From Some Articles on Ruthenians by Viktor Aradi,” 9th World Congress of ICCEES (International Council for Central and Eastern European Studies), 2015, Makuhari, Japan.
9. Haruka Miyazaki, “History as a Resource of the Populist Radical Right: The Long-Term Aftermath of Anti-Semitic Campaigns,” Polish-Jewish Relations and Anti-Semitism in Interwar Poland, 2018.
10. Haruka Miyazaki, “Who can become a Member of the Yiddish Nation? The Conditions of Nationalism,” Yiddishism and Creation of the Yiddish Nation, 2017, The University

of Tokyo.

11. Yuko Ishino, “The Acceptance of the Kalevala in Japan: From Historical and Political Perspective,” Society of the Advancement for Scandinavian Study, 2016, New Orleans.
12. 石野裕子「叙事詩『カレワラ』と創造されたフィンランド民族文化」SADI 定例講演会、2015 年、工学院大学。

[図書] (計 12 件)

1. 福田宏「スロヴァキア：国民記憶院」および「現代スロヴァキアにおける歴史論争：第二次世界大戦期の位置づけをめぐる」橋本伸也編『せめぎあう中東欧・ロシアの歴史認識問題：ナチズムと社会主義の過去をめぐる葛藤』ミネルヴァ書房、2017 年、31 頁。
2. 福田宏「ロック音楽と市民社会、テレビ・ドラマと民主化：社会主義時代のチェコスロヴァキア」村上勇介、帯谷知可 (編)『融解と再創造の世界秩序』青弓社、2016 年、24 頁。
3. 福田宏、柳澤雅之 (編)『せめぎあう眼差し：相関する地域を読み解く』(CIAS Discussion Paper, No. 56) 京都大学地域研究統合情報センター、2016 年、51 頁。
4. 福田宏「チェコスロヴァキア：プラハの春」西田慎、梅崎透 (編)『グローバル・ヒストリーとしての「1968 年」：世界が揺れた転換点』ミネルヴァ書房、2015 年、24 頁。
5. 小川浩之、板橋拓己、青野利彦『国際政治史』有斐閣、2018 年、344 頁。
6. 板橋拓己「『アメリカの社会科学』とどう向き合うか：ドイツの国際関係論 (IB) の挑戦」葛谷彩・小川浩之・西村邦行 (編)『歴史のなかの国際秩序観：「アメリカの社会科学」を超えて』晃洋書房、2017 年、19 頁。
7. ヤン・ヴェルナー・ミュラー、板橋拓己 訳『ポピュリズムとは何か』岩波書店、2017 年、163 頁。
8. 板橋拓己「ヴァイマル共和国」「分割占領下のドイツ」「基本法の制定と西ドイツの成立」森井裕一編『ドイツの歴史を知るための 50 章』明石書店、2016 年、18 頁。
9. 板橋拓己『黒いヨーロッパ：ドイツにおけるキリスト教保守派の「西洋 (アーベントラント) 主義、1925-1965 年』吉田書店、2016 年、261 頁。
10. アンネッテ・ヴァインケ著、板橋拓己 訳『ニュルンベルク裁判：ナチ・ドイツはどのように裁かれたのか』中公新書、2015 年、236 頁。
11. 石野裕子『物語 フィンランドの歴史』中公新書、2017 年、304 頁。
12. 宮崎悠「戦間期ポーランドにおける自治

と同化」赤尾光春、向井直己（編）『ユダヤ人と自治：中東欧・ロシアにおけるディアスポラ共同体の興亡』岩波書店、2017年、28頁。

6. 研究組織

(1)研究代表者

福田 宏 (FUKUDA, Hiroshi)

成城大学・法学部・准教授

研究者番号：60312336

(2)研究分担者

宮崎 悠 (MIYAZAKI, Haruka)

北海道教育大学・教育学部・講師

研究者番号：40507159

辻河 典子 (TSUJIKAWA, Noriko)

近畿大学・文芸学部・講師

研究者番号：50724738

石野 裕子 (ISHINO, Yuko)

常磐短期大学・キャリア教養学科・准教授

研究者番号：70418903

板橋 拓己 (ITABASHI, Takumi)

成蹊大学・法学部・教授

研究者番号：80507153